

シニア世代の戸外における着装調査

—— 季節による色彩傾向 ——

A Research on Outdoor Wear Form of Senior Citizens Focusing on Seasonal Tendency of Colors

伊藤きよ子 安藤文子 小野幸一 宮本教雄

Kiyoko ITO Fumiko ANDOH Koichi ONO Norio MIYAMOTO

キーワード：シニア世代、着衣、色彩、季節

Key words : senior citizens, wear, color, season

要約

春夏秋冬の各季節において、60歳以上と思われる男女を対象とし、戸外における着衣の色彩調査を実施した。その結果は以下のようである。

1. 上衣、中衣、下衣のいずれにおいても、秋季と冬季は有彩色の出現率が男女とも高いが、春季になると無彩色の出現率が増加し、夏季はさらに無彩色が増加する傾向にあった。
2. 緑系統の色相は女性の着衣に少なく、男性の上衣・下衣においても少なかった。また、男女とも低彩度の着衣の出現率が高くなる傾向にあり、特に男性の着衣において顕著に認められた。
3. 黒の出現率は、男性に比較し女性の着衣の方が高かった。黒は紫外線防止効果の高い色とされており、この効果を着衣の色に求める女性の存在が黒の出現率を高めた原因のひとつであると推察される。

Abstract

This study aims to make clear how senior citizens wear in form when they are outdoors with the cycle of the seasons (spring, summer, autumn and winter), especially, paying attention to the change of colors. The major results are as follows:

1. Many senior citizens have the tendency to wear clothes in chromatic color, both in the case of outer and inner garments, during the seasons of autumn and winter. In spring, however, they tend to wear clothes in achromatic color, and they do in summer with higher probability of that sort of color.
2. Females in green are not frequently observed, and the same is true for males both in outer and inner garments. The appearance ratio of people in less chromatic color is

high; especially this tendency is remarkable for male persons.

3. The appearance ratio of people in black is high among female people in comparison to males. The color of black is expected to protect the female skin from UV rays. It can be concluded that this fact is one of the reasons for females to like to wear in black better than males.

1. はじめに

平成22年版高齢社会白書（内閣府、2010）によれば、60歳以上の男女で若い世代と何らかの交流の機会がある人は54.9%で、今後若い世代との交流の場に参加したいと考える人は62.4%に上ったという。また、60歳以上の男女の59.2%がなんらかのグループ活動に参加しており、10年前に比較すると15.5ポイント増加しているとも報告している。具体的には、健康・スポーツ活動が最も多く、地域行事、趣味、生活環境改善、教育・文化と続いている。シニア世代の多くが積極的に活動していることをうかがわせるデータである。白書は社会参加活動の有無とおしゃれへの関心度の関係についても記しており、活動に参加している人でおしゃれをしたい人は71.2%、参加していない人のそれは54.0%と、活動に参加している人の方がおしゃれへの関心度が高いと述べている（数値は平成20年調査による）。社会参加活動によって他者を意識し、それが自己の外観を気にする動機となっておしゃれへの関心度が高まるのである。

外観は精神面の活性化に影響を与える。その外観を整え、おしゃれをするための重要な要素のひとつは衣服である。したがって、シニア世代の社会参加活動が増加している今日、衣服への関心はますます高まるものと思われる。

石塚ら（2006）は、シニア世代のおしゃれに対する関心の傾向について施設入所者を対象として調査し、色彩の選択への関心が最も高いと報告している。また、辻ら（1987）は、上着類の購入時に配慮する項目として色・柄が男女ともに最も高率であったとし、土田ら（1995）も女性を対象とした調査において、スカート以外は色・柄を重視していると報告している。そこで、本研究では、人のところに情感を与え、生活意欲や活力に影響を与える（庄山ら、1999）衣服の色彩に着目した。

これまで、シニア世代の衣服の色彩に関しては、イメージ評価（庄山ら、1999）や嗜好調査（文田ら、1982）（今井ら、1990）（影山ら、1991）（上原ら、2004）について研究がなされている。実際の衣服の色彩については、大関（2003）が店頭において婦人服の売れ筋を調査しており、名取（2003）は女性の半世紀にわたる定点調査の結果を報告しているが、いずれもシニア世代を対象にしたものではない。上原ら（2004）は、シニア世代が着用している衣服を測色している。しかし、研究方法の都合により20名の女性のみ結果となっている。このように、実際に着用している衣服を観察して色彩を調査している研究は少ない。

そこで、筆者らはシニア世代の男女を対象とし、四季を通して戸外における着衣の色彩の実態調査を実施した。シニア世代が実際に着用している衣服の色彩傾向、特に情報の少ない男性の色彩傾向を得ること、および、シニア世代が衣服の色彩をどのように利用しているか把握する手掛かりを得ることが本研究の目的である。

2. 調査方法

シニア世代が多く集まる名古屋市内の寺2箇所において、2007年11月から2008年11月の寺の縁日に当たる日に、60歳以上と思われる男女を無作為にデジタルカメラで撮影した。その資料をキャノンプリンタ LBP5300 で印刷し、春夏秋冬の各季節における着衣の色彩を、服種ごとにカラーチャートを用いて調査した。なお、柄物の着衣については、視覚的に最も広い面積を占めていると判断される色を調査の対象とした。各季節の撮影調査日は表1に、調査対象者数は表2に示した。

表1 撮影調査日

季節	調査日
春季	2008年4月21日(月)
夏季	2008年8月21日(木)
秋季	2007年11月13日(火)
	2008年11月5日(水)
冬季	2007年12月21日(金)

表2 調査対象者の人数

季節	男性(名)	女性(名)	合計(名)
春季	291	291	582
夏季	184	288	472
秋季	281	367	648
冬季	235	300	535

なお、服種は、コート・ジャケット・カーディガンなど、内側に他の衣服を着用することが多い衣服を上衣とし、シャツ・ブラウス・Tシャツ・ワンピースなど、上衣以外の上半身用衣服を中衣、下半身用衣服を下衣として3種類に分類した。したがって、ワンピースや和服の長着は中衣であると同時に下衣でもあり、両方で色彩調査を実施した。また、上衣に分類した衣服、あるいは中衣に分類した衣服を複数着用している場合は、すべてを調査の対象とした。

カラーチャートは、12の色相と11のトーンの組み合わせによる計132色の有彩色と、10色の無彩色、合計142色の色票をN7.5の台紙に貼付し作成した。調査では、これをデジタルカメラで撮影して着衣の写真と同様に印刷したものを使用した。色票は、PCCS

表3 有彩色の色相とトーン

色相		トーン	
色相名	記号	トーン名	記号
赤	R	ベール	p
赤みの橙	rO	ライトグレッッシュ	ltg
黄みの橙	yO	グレイッシュ	g
黄	Y	ダークグレイッシュ	dkg
黄緑	YG	ライト	lt
緑	G	ソフト	st
青緑	BG	ダル	d
緑みの青	gB	ダーク	dk
青	B	ブライツ	b
青紫	V	ディープ	dp
紫	P	ビビッド	v
赤紫	RP		

表4 無彩色

色名	記号
白	W
灰色	Gy-9
	Gy-8
	Gy-7
	Gy-6
	Gy-5
	Gy-4
	Gy-3
Gy-2	
黒	Bk

(Practical Color Co-ordinate System) に準拠している日本色研事業(株)発行の新配色カード199を用いた。カラーチャートに用いた有彩色の色相とトーンは表3、無彩色は表4に示すとおりである。

3. 結果と考察

(1) 有彩色と無彩色の出現傾向

上衣、中衣、下衣に分類した着衣の、各季節における有彩色と無彩色の出現率を男女別に求め、その傾向について検討した。

1) 男性

図1は男性の上衣の結果である。なお、上衣の着用数は春季209、秋季279、冬季259であった。夏季は上衣の着用数が6と少なかったため除外した。以後、着用数はN=とし、春季、夏季、秋季、冬季の順に示すこととする。各季節とも有彩色の出現率が高いが、 χ^2 検定の結果、各季節における出現率に有意差が認められ ($\chi^2(2)=36.19$, $p < .01$)、特に、秋季と冬季はそれぞれ74.9%、79.2%と高い出現率を示した。

中衣 (N=285、188、242、189) の結果は図2に、下衣 (N=291、184、282、234) の結果は図3に示した。いずれも上衣と同様に、秋季と冬季において有彩色が70%以上の高い出現率となり、両季節に差は見られなかった。無彩色の出現率は春季になるとやや増加し、夏季にはさらに増加した。特に夏季の中衣は52.1%と、過半数が無彩色であった。 χ^2 検定の結果、いずれの服種においても有意水準1%で季節による色彩の出現率に差が認められた(中衣： $\chi^2(3)=55.86$, $p < .01$ 、下衣： $\chi^2(3)=28.27$, $p < .01$)。

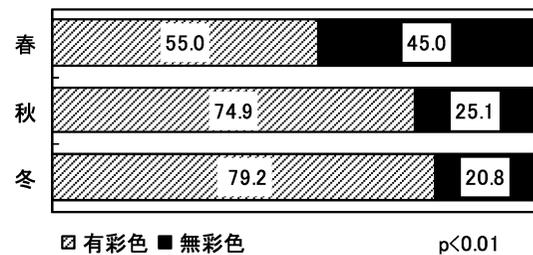


図1 上衣の有彩色と無彩色の出現率 —男性—

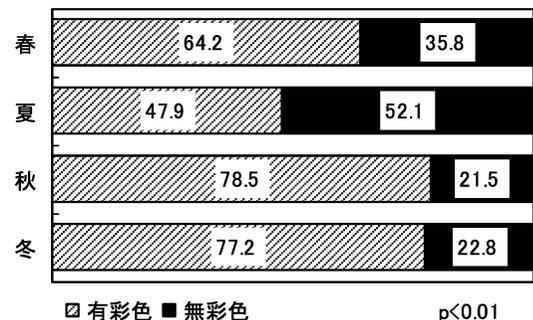


図2 中衣の有彩色と無彩色の出現率 —男性—

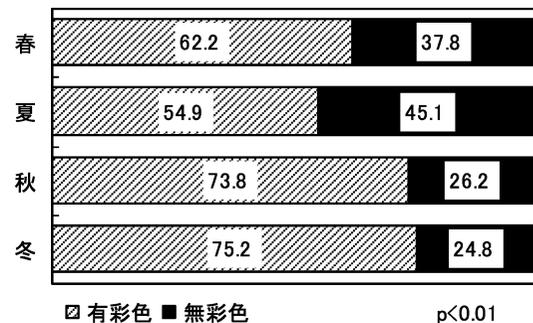


図3 下衣の有彩色と無彩色の出現率 —男性—

2) 女性

女性の着衣の結果は図4～6に示した。 χ^2 検定の結果、いずれも有意水準1%で季節による色彩の出現率に差が認められた(上衣: $\chi^2(3)=72.24$ 、 $p<.01$ 、中衣: $\chi^2(3)=87.99$ 、 $p<.01$ 、下衣: $\chi^2(3)=73.62$ 、 $p<.01$)。

図4の上衣(N=166、62、355、306)では、秋季・冬季と春季・夏季とで明らかに出現率に差が見られ、前者の無彩色は10%台であるのに対し、春季は41.0%と秋季や冬季の2倍以上の出現率となった。夏季にはさらに無彩色の出現率が増加し、51.6%を占めた。

図5の中衣(N=284、318、294、131)においても、秋季と冬季は無彩色の出現率が16.0%、19.1%と低く、春季と夏季は半数を占めるまでには至らないものの40%前後の出現率を示した。

下衣(N=291、287、368、300)の結果は図6に示した。春季と夏季は無彩色がそれぞれ54.6%、50.5%と過半数を占めた。春季、秋季、冬季は、上衣や中衣に比較して無彩色の出現率が増加していることがわかる。

以上のように、上衣、中衣、下衣のいずれにおいても、秋季と冬季は有彩色の出現率が男女とも高いが、春季は無彩色の出現率が増加し、夏季はさらに無彩色が増加する傾向にあることがわかった。

(2) 有彩色の色相とトーン

着衣に使用されていた有彩色について、その色相とトーンの出現率を求めた。出現率は、各季節および各服種における有彩色の着衣数を除数として算出した。

1) 男性

上衣(N=115、一、209、205)の色相を図7に、トーンを図8に示した。 χ^2 検定では、色相($\chi^2(22)=71.21$ 、 $p<.01$)もトーン($\chi^2(20)=59.68$ 、 $p<.01$)も有意水準1%で季節による

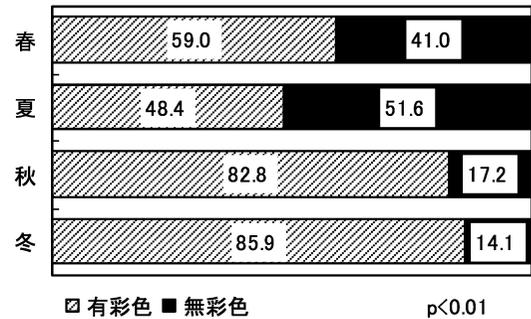


図4 上衣の有彩色と無彩色の出現率 一女性一

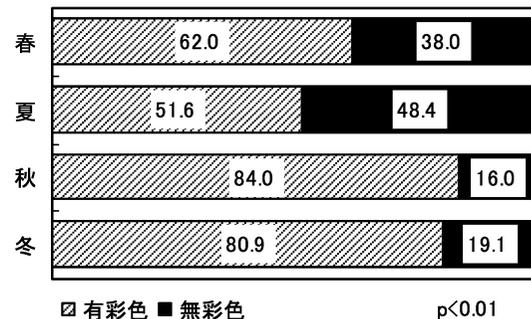


図5 中衣の有彩色と無彩色の出現率 一女性一

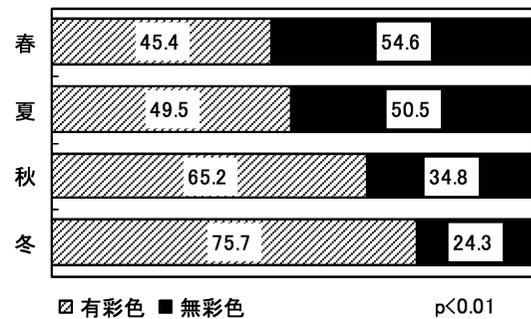


図6 下衣の有彩色と無彩色の出現率 一女性一

出現率に差が認められている。

図7より、色相ではY（黄）の出現率が春季25.2%、秋季20.6%、冬季18.5%と、3季節とも高かったことがわかる。次いで出現率の高い色は、春季と秋季はV（青紫）で20.0%、16.8%、冬季はRP（赤紫）の12.7%であった。春季と秋季はB（青）も14.8%、13.9%となり、Vとともに冬季との出現率の差の大きい色相であった。一方、G（緑）やBG（青緑）はいずれの季節においても0.9~4.9%と出現率が低い傾向にあった。トーンは、図8に見られるように、春季は低彩度で中明度からやや高明度のltg（ライトグレイッシュ）トーンが37.4%の高い出現率となった。秋季と冬季は、やや低明度で低彩度のg（グレイッシュ）トーンと、ltgトーンが23.4~28.7%の出現率となり、両季節とも2トーンで50%以上を占めた。高彩度のv（ビビッド）トーンと中~高明度でやや高彩度のb（ブライツ）トーンは0.0~2.0%と、いずれの季節においても出現率が低かった。

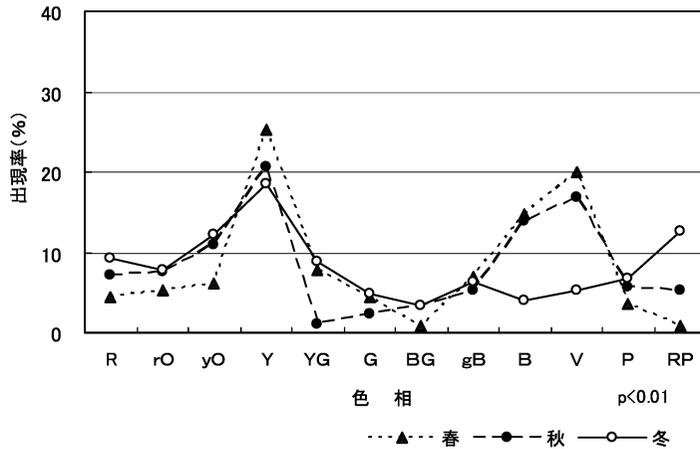


図7 上衣の色相 —男性—

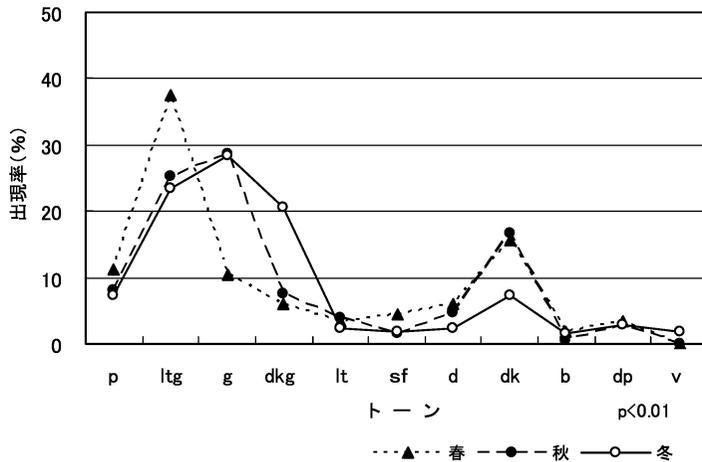


図8 上衣のトーン —男性—

中衣 (N=183、90、190、146) の結果は図9、図10に示した。色相は、春季と夏季はBの出現率が高く、特に夏季は33.3%を占めた。秋季もB (13.7%) が最も高いが、Vも同程度の出現率 (12.6%) を示した。冬季はYやyO (黄みの橙) の出現率が高く、17.8%がYであった。トーンは、春季はltg トーンと高明度で低彩度のp (パール) トーンがそれぞれ20.8%、16.9%で上位となり、夏季はp トーン (34.4%)、ltg トーン (28.9%) の2 トーンで65%を占めた。秋季はltg トーンが27.9%、g トーンが20.0%を占めた。冬季もltg トーンとg トーンが1位、2位となったが、その率は18.5%と14.4%で秋季より低かった。v トーンとb トーンは、中衣においても0.0~3.4%と出現率が低かった。なお、 χ^2 検定の結果、色相 ($\chi^2(33)=119.84$, $p < .01$)、トーン ($\chi^2(30)=59.80$, $p < .01$) において有意水準1%で季節による出現率に差が認められている。

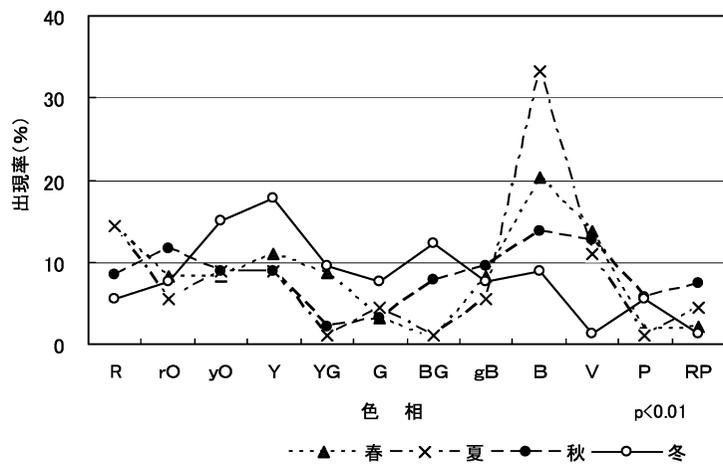


図9 中衣の色相 —男性—



図10 中衣のトーン —男性—

図11と図12は、下衣 (N=181、101、208、176) の色相とトーンの結果である。 χ^2 検定では、

有意水準1%で色相 ($\chi^2(33)=94.50$ 、 $p < .01$) もトーン ($\chi^2(30)=142.88$ 、 $p < .01$) も、季節における出現率に差が認められた。

春季と夏季、秋季の色相ではVの出現率が最も高く、それぞれ27.6%、30.7%、24.5%を占めた。また、色相の出現傾向が似通っていることがわかる。冬季に最も出現率が高かったのはyO(14.2%)であるが、rO、Y、B、P(紫)も10.8~12.5%と近似の数値を示した。YG(黄緑)、G、BGの3色相は、各季節において出現率が他の色相より低くなる(1.0~3.9%)傾向にあった。トーンは、春季は低明度で中彩度のdk(ダーク)トーンが29.3%と最も多く、次いでltgトーンの21.0%であった。夏季は低明度で低彩度のdkg(ダークグレイッシュ)トーンが29.7%を占めた。ltgトーンとgトーンもそれぞれ27.7%、26.7%となり、低彩度の3トーンが約85%を占める結果となった。秋季はgトーンが39.9%、dkトーンが21.6%であった。冬季はgトーンが42.6%で最も出現率が高く、次いでdkgトーンが23.9%を占めた。

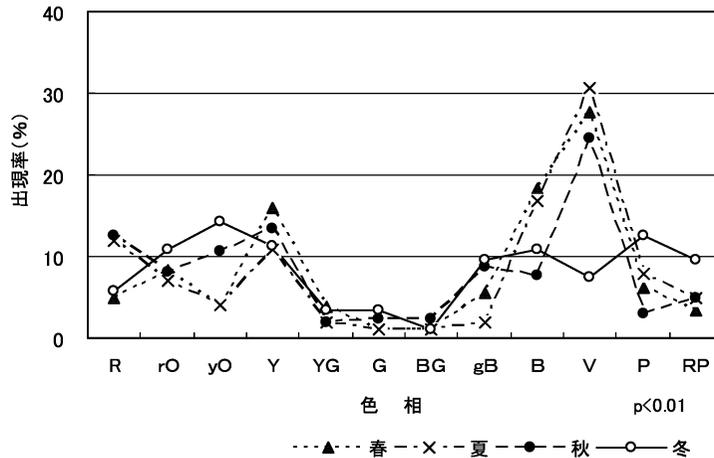


図11 下衣の色相 —男性—

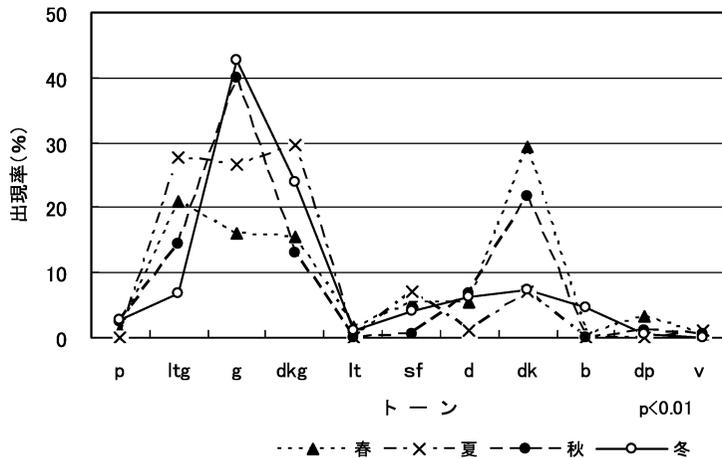


図12 下衣のトーン —男性—

このように、冬季以外の季節はBやVといった寒色系の色相が多く出現した。暑熱時期に寒色系の衣服を着用して涼しく見せることはよく試みられることであるが、春季や秋季においても寒色系のBやVが多く出現したのは、それが男性らしい衣服の色として定着しているからではないかと推察される。また、下衣においては、ジーンズパンツの着用者が冬季よりその他の季節に多く存在したことも、寒色系が多い理由のひとつとして考えられる。一方、冬季はYやyOあるいはRPの暖色系の出現率が高く、ltg トーンのベージュ系やg トーンなどの茶系の衣服を着用している者が多いことを確認している。しかし、暖色系の色相であっても彩度が低いため、暖かいという印象はあまり高くないと思われる。

トーンは、春季と夏季において、秋季や冬季より高明度のトーンの出現率が高くなる傾向にあった。また、いずれの季節および着衣においても低彩度の色彩が好まれることがわかった。

2) 女性

女性の上衣 (N=98, 30, 294, 263) の色相は図13に示した。 χ^2 検定の結果、有意水準1%で季節による色相の出現率に差がみられた ($\chi^2(33)=61.06$, $p < .01$)。春季と秋季はRP、Vの順に出現率が高く、RPは春季16.3%、秋季21.4%、Vは両季節とも15.3%であった。夏季はBが16.7%となり、V、rO (赤みの橙)、yOの3色相がそれぞれ13.3%を占めた。冬季はR (赤) が21.7%で最も出現率が高く、次いでrOが15.2%の出現率を示した。暖色系の色相であるR、rO、yO、Y、RPの出現率を合計すると、いずれの季節も50%以上となり、特に冬季の出現率が72.6%と高くなった。出現率の低い色相はYG、G、BG、gB (緑みの青) (0.0~3.3%)で、それはどの季節においても共通していた。

上衣のトーンは図14に示した。トーンも、季節によって出現率に差が認められた ($\chi^2(30)=93.53$, $p < .01$)。春季はpトーンが22.4%となり、次いでltgトーンとdkトーンがそれぞれ16.3%を占めた。夏季はltgトーンが20.0%を占め、次いでdkgトーンの16.7%であった。また、男性の着衣では出現

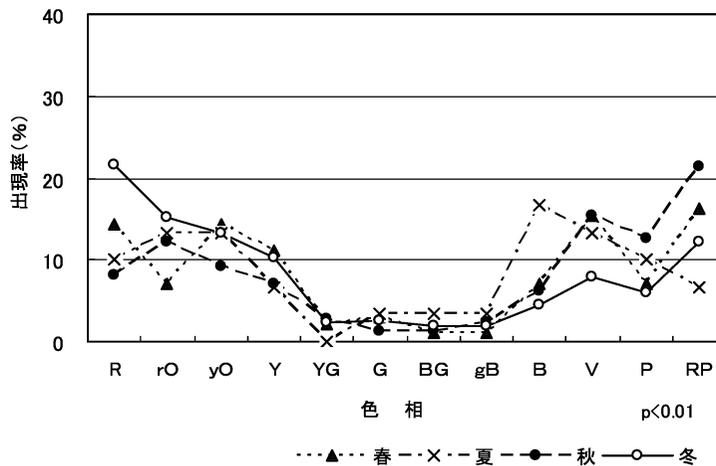


図13 上衣の色相 —女性—

率の低いlt (ライト) トーンが13.3%を占めた。秋季に最も出現率が高かったトーンはg トーンで23.1%を占め、次に高いdk トーンは20.4%であった。冬季はg トーン21.7%、dkg トーン18.6%の順であった。b トーン、v トーンは四季を通して出現率が低かった (0.0~4.2%)。

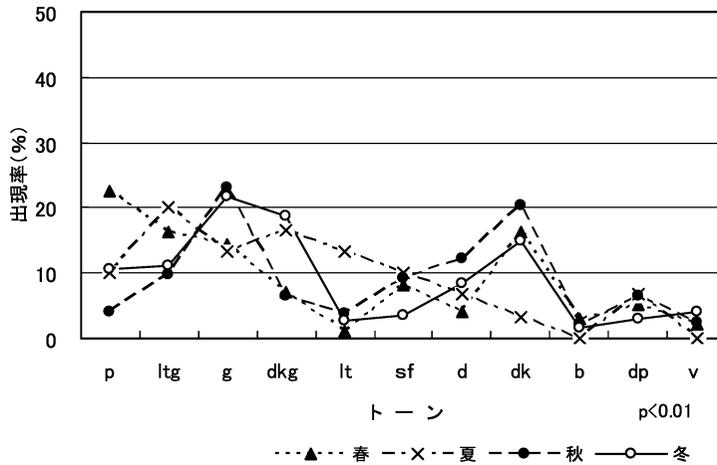


図14 上衣のトーン —女性—

中衣 (N=176、164、247、106) の色相は図15、トーンは図16に示した。 χ^2 検定の結果、有意水準1%で、色相 ($\chi^2(33)=108.73$, $p < .01$) もトーン ($\chi^2(30)=90.54$, $p < .01$) も各季節において出現率に差がみられた。

春季はRPが21.0%、Rが19.9%と赤系統の色相が1位、2位を占めた。夏季はRが18.3%、Bが17.1%、Yが15.9%と、主要色相のうちの3色相がほぼ同様の出現率を示した。秋季はRPが23.9%で最も出現率が高かった。冬季はR(17.9%)、rO(16.0%)、RP(16.0%)となり、この暖色系の3色相で半数を占めた。出現率の低い色相は季節によりやや異なり、春季はgB(1.7%)、夏季はG(0.0%)、P(0.6%)、YG(2.4%)、秋季はYG(2.8%)とG(2.8%)、冬

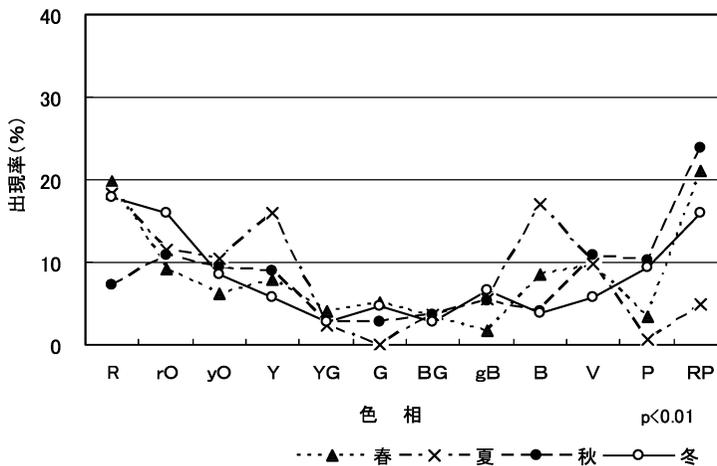


図15 中衣の色相 —女性—

季は YG (2.8%) と BG (2.8%) であった。これにより、緑系統の色相の出現率が低い傾向にあることがわかる。トーンは、春季と夏季において p トーン、ltg トーンの出現率が高く、特に夏季はそれぞれ 23.2% を占めた。秋季は g トーンと dk トーンが各 17.0%、冬季は dkg トーンが 16.0% の出現率を示した。また出現率は高くないが、v トーンが冬季に 9.4% の数値を示した。

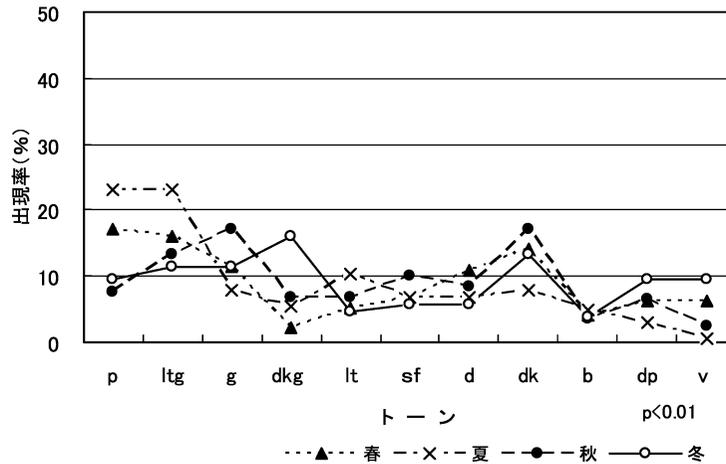


図16 中衣のトーン 一女性一

下衣 (N=132、142、240、227) の色相は図17に示した。 χ^2 検定の結果、各季節における色相の出現率には有意水準1%で差がみられた ($\chi^2(33)=151.47$, $p < .01$)。春季はRの出現率が26.5%と高く、次いでVの17.4%となった。夏季はRが25.3%、Bが22.5%を占め、秋季はRPとVが、それぞれ24.2%、22.9%の高い出現率を示した。冬季はRP、rO、R、yOの暖色系が13.2~15.9%とほぼ同様の出現率であった。どの季節においても出現率の低かった色相は、緑系統のYG、G、BGであった(0.0~2.6%)。

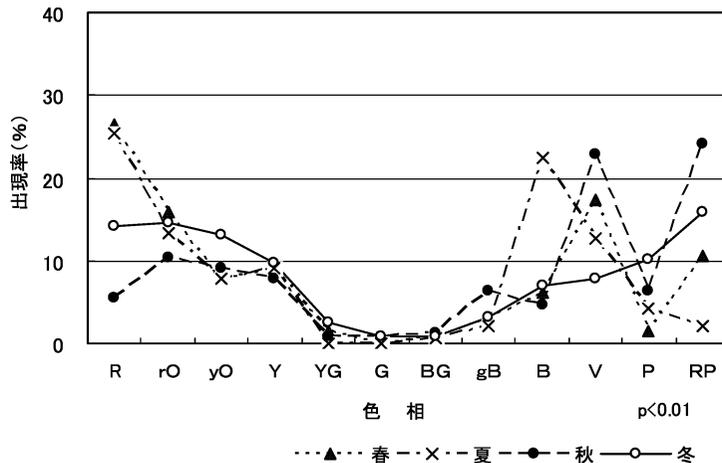


図17 下衣の色相 一女性一

下衣のトーンの結果は図18に示した。各季節におけるトーンの出現率にも有意水準1%で差が

認められた ($\chi^2(30)=199.17$, $p<.01$)。春季は dk トーンが 27.7%と最も多く、ltg トーン (23.5%) と g トーン (20.5%) も 20%以上の出現率であった。夏季は ltg トーンが 37.3%の出現率を示し、次いで g トーンが 23.2%を示した。秋季は g トーンが 42.9%と高い出現率を示した。dk トーンも 22.1%の出現率であった。冬季は dkg トーン 36.1%、g トーン 27.8%の順であった。p トーン、lt トーン、b トーン、dp トーン、v トーンといった明度の高いトーンや彩度の高いトーンは出現率が低かった (0.0~4.6%)。

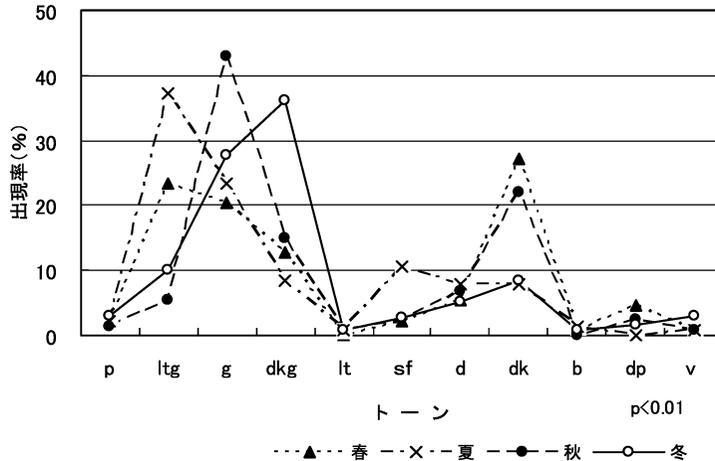


図18 下衣のトーン 一女性一

男性の着衣には冬季を除き寒色系の色相が多く出現したが、女性の場合にはどの季節においても R や RP といった暖色系の色相の出現率が高い傾向にあった。また、それは上衣、中衣、下衣のいずれにおいても認められた。上原ら (2004) の調査でも、色相はやや異なるものの、暖色系が四季を通して多くみられたと報告されており、暖色系は女性の着衣において代表的色相と考えられる。本研究で多く出現した R と RP については、庄山ら (1999) が、最も理想的で着たい服装色を60歳以上の高齢者を対象として調査した結果、R が最も理想的色相であり、次に多いのが RP であったと報告している。また、R は日常よく着ている色として1位であったことも報告している。庄山ら (1999) の調査は1998年に実施したものであるが、10年を経た今日でも、R と RP はシニア世代の女性にとって着用したい色相であり、それが現実に着用する色相となっているのではないかと考える。逆にあまり着用されていない色相は、季節や着衣の種類にかかわらず緑系統であった。シニア世代は緑系統の衣服を好まないのか、あるいは市場に出回る量が少ないのか、その理由については今後の課題とする。

トーンについては、男性の着衣と同様に、春季と夏季の方が秋季と冬季より高明度のトーンが多い傾向にあった。また、秋季の上衣を除き、低彩度のトーンが多くを占める結果となった。シニア世代は高彩度の色彩を派手すぎるととらえ、着用者が少ないものと思われる。

(3) 無彩色の色彩

10種類の無彩色について、その出現率を服種別に求めた。出現率の算出は有彩色と同様の方法により行った。

1) 男性

図19に男性の上衣 (N=94、春、70、54) の結果を示した。 χ^2 検定の結果、各季節における色彩の出現率には有意水準1%で差がみられ ($\chi^2(18)=85.84$, $p < .01$)、春季は、本調査で使用した灰色の中で最も明度の高いGy-9が37.2%と高い出現率を示し、W(白)も25.5%を示した。中明度と低明度の無彩色は低い出現率であった。秋季では高明度のGy-8が18.6%となり、低明度のGy-2、Bk(黒)を除いたその他の無彩色もそれぞれ10%前後の出現率を示した。冬季はGy-9が29.6%、Bkが22.2%となり、中明度の出現率は低かった。

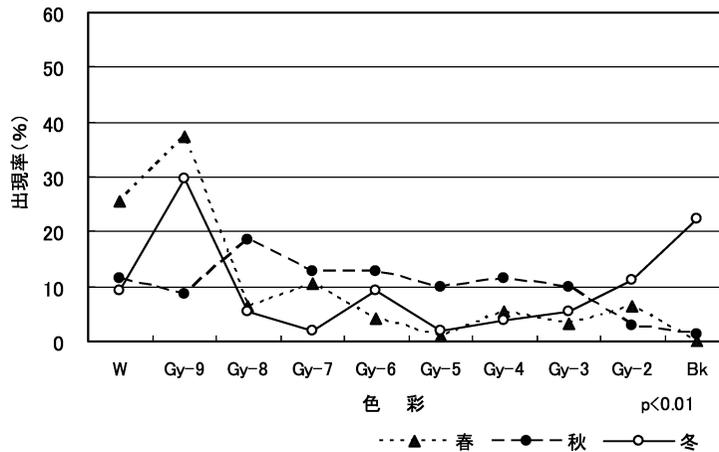


図19 上衣の無彩色 —男性—

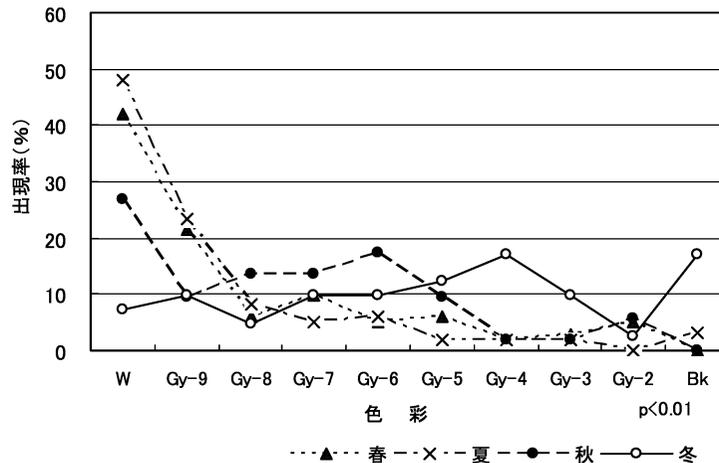


図20 中衣の無彩色 —男性—

図20は中衣 (N=102、98、52、43) の結果である。Wの出現率が春季 (42.2%)、夏季

(48.0%)で高く、Gy-9も春季で21.6%、夏季で23.5%を示した。春季は中衣においても中明度と低明度の無彩色は出現率が低く、夏季も高明度以外は低い出現率となった。秋季もWが最も出現率が高いが、その数値は26.9%にとどまった。次に高いのは中明度のGy-6で17.3%の出現率であった。低明度は出現率が低かった。冬季はBkとやや低明度のGy-4が同率となり、17.1%を示した。 χ^2 検定では、季節における色彩の出現率に有意水準1%で差が認められた($\chi^2(27)=98.97$ 、 $p < .01$)。

下衣(N=110、83、74、58)の結果は図21に示した。下衣も季節における色彩の出現率に差が認められ($\chi^2(27)=60.30$ 、 $p < .01$)、春季はGy-4(22.7%)、夏季は中明度のGy-5(24.1%)、秋季はGy-4(20.3%)、冬季はBk(29.3%)と、気温の低い季節は明度が低く、気温の上昇に伴って明度もやや高くなる傾向が見られた。

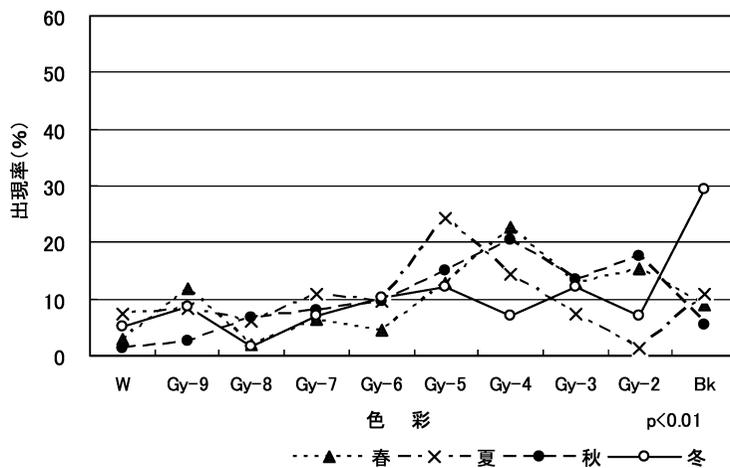


図21 下衣の無彩色 一男性一

以上のように、高明度の無彩色は春季と夏季、秋季の上半身用衣服で出現率が高く、冬季の上衣でも高かった。中明度からやや低明度の無彩色は春季、夏季、秋季の下衣と冬季の中衣で多く出現した。最も低明度のBkは冬季の着衣に多く出現したが、その他の季節では少なく、特に上衣と中衣はほとんど出現していない。田岡ら(2006)は、Bkはシニア世代(原文は高齢者)が嫌う色の代表であるが、配色に便利である、と述べている。Bkが冬季に多く、他の季節に少ないのは、ここに理由があると思われる。すなわち、他の季節には嫌いな色を使用しないが、重ね着枚数の多くなる冬季においてはコーディネート容易さは重要であり、そのため、冬季はあえてBkの衣服を着用していると考えられる。

2) 女性

図22は上衣(N=68、32、61、43)の結果である。春季はBkが35.3%、Wが30.9%と、最も低明度と最も高明度の無彩色が多くを占めた。夏季はWが40.6%、Bkが34.4%となり、春季よりWが約10%増加している。秋季はGy-5の19.7%が最も高く、次いで高いのはGy-6の

14.8%であった。冬季はGy-9が30.2%の出現率を示し、BkとWもそれぞれ25.6%、20.9%と20%以上の出現率を示した。春季と夏季、冬季においてはGy-8からGy-2の出現率が低かった(0.0~7.4%)。χ²検定の結果、季節による色彩の出現率には有意水準1%で有意差が認められている(χ²(27)=105.29、p<.01)。

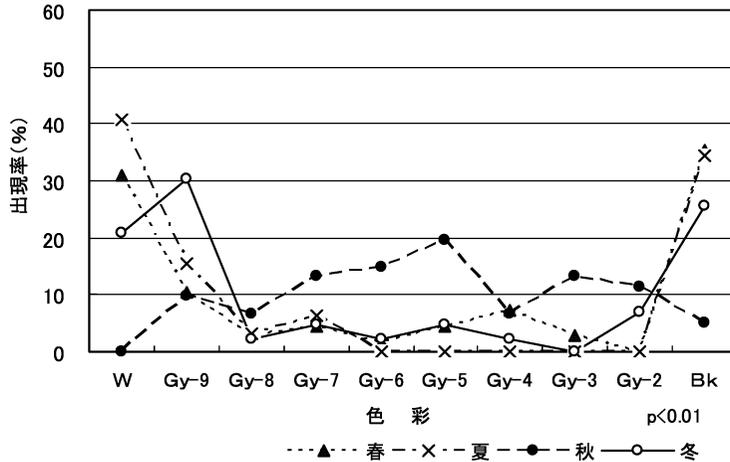


図22 上衣の無彩色 —女性—

中衣 (N=108、154、47、25) の結果は図23に示した。春季はBkとWがそれぞれ29.6%、27.8%を占め、夏季はWが30.5%、Bkが26.6%、Gy-9が20.8%を占めた。春季、夏季ともにGy-8からGy-2の出現率は低かった(0.7~7.1%)。秋季はGy-7が19.2%の出現率を示し、次いで高いのはGy-9の14.9%であった。冬季はBkが36.0%と最も高く、Gy-9が16.0%で2位となった。χ²検定の結果、季節間の色彩の出現率には有意水準1%で差が認められた(χ²(27)=69.92、p<.01)。

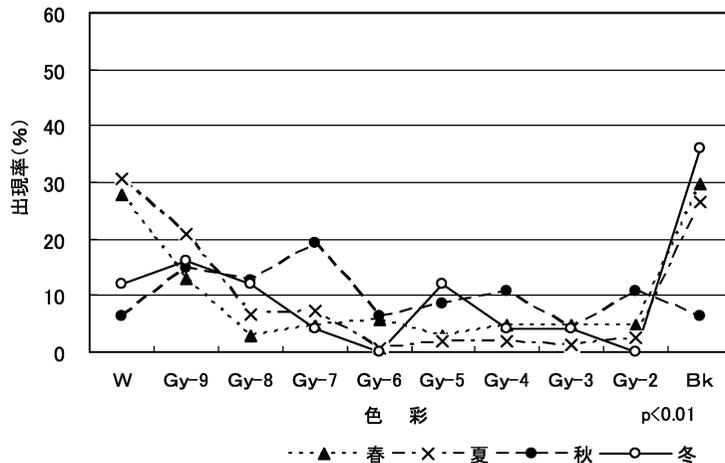


図23 中衣の無彩色 —女性—

図24には下衣 (N=159、145、128、73) の結果を示した。春季、夏季、冬季はBkが多く、

それぞれ 55.4%、39.3%、46.6%と高い出現率となった。秋季は Gy-2 が 28.1%、Bk が 25.8% を占めた。W はどの季節においても低い出現率 (0.8~5.7%) となった。χ²検定では、季節における色彩の出現率に有意水準 1% で差が認められた (χ²(27)=147.18、p<.01)。

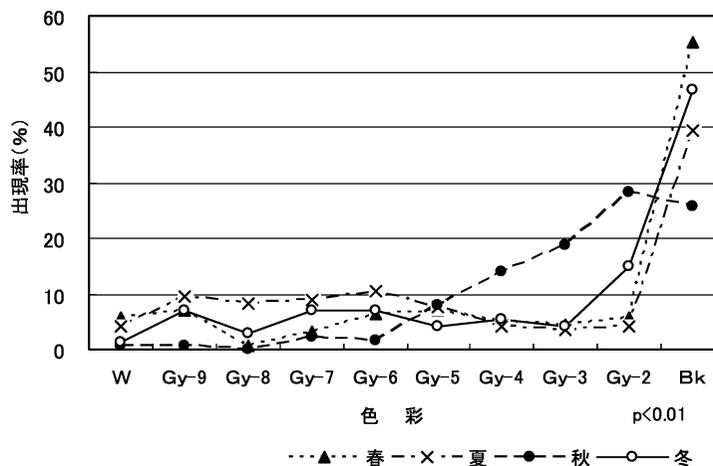


図24 下衣の無彩色 —女性—

以上のことから、女性の上衣と中衣に多い無彩色は、秋季を除くと、最も高明度の W か最も低明度の Bk であり、下衣は Bk であることがわかる。Bk は男性に比較し女性の着衣の方が明らかに多く、特に春季と夏季において顕著であった。黒は紫外線防止効果の高い色とされており、この効果を着衣の色に求める女性の存在が黒の出現率を高めた原因のひとつであると推察される。

4. おわりに

シニア世代の男女を対象とし、戸外における着衣の色彩調査を実施した。着衣は上衣、中衣、下衣の3種類に分類し、春夏秋冬の4季節における色彩傾向を検討した。おもな結果は次の通りであった。

- 1) 上衣、中衣、下衣のいずれにおいても、秋季と冬季は有彩色の出現率が男女とも高いが、春季は無彩色の出現率が増加し、夏季はさらに無彩色が増加する傾向にあった。
- 2) 男性の着衣に使用されていた有彩色は、冬季を除き、青や青紫といった寒色系の色相が多かった。春季や秋季において寒色系の青や青紫が多く出現したのは、それが男性らしい衣服の色として定着しているからではないかと推察される。
- 3) 女性の着衣に使用された有彩色では、どの季節においても赤や赤紫といった暖色系の色相の出現率が高い傾向にあった。それは上衣、中衣、下衣のいずれにおいても認められた。
- 4) 緑系統の色相は女性の着衣に少なく、男性の上衣・下衣においても少なかった。シニア世代は緑系統の衣服を好まないのか、あるいは市場に出回る量が少ないのか、その理由については今後の課題とする。

- 5) 男女ともに、秋季と冬季より春季と夏季の方が、高明度のトーン（有彩色）の出現率が高くなる傾向にあった。また、4季節とも低彩度のトーンの出現率が高くなる傾向にあり、特に男性の着衣において顕著に認められた。
- 6) 男性の上半身用衣服は高明度の無彩色が多く、中明度からやや低明度の無彩色は春季、夏季、秋季の下衣に多く出現した。黒は冬季の着衣に多く出現したが、その他の季節では少なく、特に上衣と中衣はほとんど出現していない。何枚も衣服を着用する冬季ではコーディネート の容易さは重要であり、そのため、配色に便利な黒の出現率が高くなったと考える。
- 7) 女性の上衣と中衣に多い無彩色は白か黒であり、下衣に多い無彩色は黒であった。黒は男性に比較し女性の着衣の方が明らかに多く、特に春季と夏季において顕著であった。黒は紫外線防止効果の高い色とされており、この効果を着衣の色に求める女性の存在が黒の出現率を高めた原因のひとつであると推察される。

以上のように、シニア世代の着衣の色彩は、男女ともに春季・夏季群、秋季・冬季群の2分類で説明できる場合が多いが、秋季は春季・夏季群に属する場合もあることがわかった。

本調査は名古屋市内の寺にて撮影した資料をもとに行ったものである。したがって、地域差がないか確認するためには、調査地域を拡大する必要があると考える。

引用文献

- 田村哲雄、北村トモエ、1982. 鹿児島県、高齢者婦人の衣生活における色彩嗜好、鹿児島県立短期大学紀要、33：39-50.
- 今井弥生、井澤尚子、中野刀子、1990. 高齢者の色彩嗜好の構造、色彩学会誌、14：13-14.
- 石塚敦子、小川妙子、2006. 施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機、順天堂大学医療看護学部医療看護研究、2：11-16.
- 影山明子、小森谷廣子、坂田勝亮、1991. 高齢者の色彩嗜好に関する調査研究 一第1報一、色彩学会誌、15：21-22.
- 内閣府、2010. 平成22年版高齢社会白書. 佐伯印刷.
- 名取和幸、2003. 半世紀にわたる女性服装色実態調査、色彩学会誌、27：324-329.
- 大関徹、2003. 百貨店店頭定点観測に見る服装色の特徴、色彩学会誌、27：330-334.
- 庄山茂子、栃原裕、1999. 高齢者の服装色に関するイメージ評価、生理人類学会誌、4：123-132.
- 田岡洋子、高森壽、井澤尚子、齋藤祥子、椋梨純枝、青木迪佳、高木くに子、2006. 高齢者の生活意識と衣服環境 一性差について一、京都短期大学紀要、34、1：1-12.
- 土田正子、簗美代子、倉橋久子、伊藤五子、1995. シルバー世代の衣生活調査、服飾学会誌、14：168-175.
- 辻啓子、伊藤きよ子、1987. 高齢者の被服購入の現状、家政学会誌、38：69-75.
- 上原真樹、松浦加恵子、小野木禎彦、2004. 西宮市在住女性高齢者の着衣の調査研究 一女子大生との外衣の色彩嗜好比較一、家政学会誌、55：551-560.